

# 9. $^{123}\text{I}$ -IMP による経直腸門脈シンチグラフィの有用性

下村 修 原 正史 富口 静二  
伊豆永浩志 小山 智子 山本 宏昭  
古閑 幸則 辻 明德 吉岡 仙弥  
広田 嘉久 高橋 睦正 (熊本大・放)

慢性肝炎や肝硬変などのび慢性肝疾患に対し、 $^{123}\text{I}$ -IMP による経直腸門脈シンチグラフィを行い、porto-systemic shunt index (PSS index) を求めた。PSS index は投与 30 分後の肺と肝の count を、縦隔に設定した back-ground にて補正した上で、肺の count を肺と肝の count にて除して求めた。その結果、肝障害が進むにつれて PSS index は増加し、食道静脈瘤の程度ともよく相関した。また、ICG-R15 との間にも良好な正の相関が得られた。本法は、非侵襲的で簡便であり、門脈大循環短絡の程度をよく評価できる優れた診断法であると思われる。

# 10. $^{18}\text{F}$ FDG-PET 腫瘍イメージング

一矢 有一 桑原 康雄 大塚 誠  
田原 隆 三宅 義徳 増田 康治  
(九州大・放)

腫瘍における糖代謝の測定が、腫瘍の進展範囲の決定、治療効果の予測、あるいは治療効果の判定に役立つかどうかを検討するため、 $^{18}\text{F}$ FDG-PET による腫瘍組織における糖代謝を測定した。対象は、頸部リンパ節転移、肺癌などの悪性腫瘍 11 例、良性腫瘍 2 例、炎症性腫瘍 3 例の計 16 例である。6 例では、治療後にも検査を行った。 $^{18}\text{F}$ FDG は 2-7 mCi 投与し、20-40 分後に検査した。一部の症例では、投与直後よりのダイナミックスキャンも行った。検出器は、Headtome III を用いた。その結果、腫瘍では囊腫の 1 例を除き、 $^{18}\text{F}$ FDG の高い集積を示した。炎症性腫瘍 3 例でも、いずれも  $^{18}\text{F}$ FDG 集積がみられた。また、治療後における  $^{18}\text{F}$ FDG 集積は、1 例を除きいずれも低下していた。 $^{18}\text{F}$ FDG-PET は腫瘍の代謝をみる方法として、その治療効果判定に用い得る可能性が示唆された。

# 11. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT の集積がみられた Hepatoblastoma の一例

花城 可雅 島袋 國定 大城 潔  
堀 晃 宮崎 俊幸 永田 凱彦  
(沖縄県立中部病院)

Hepatoblastoma の男児 (3 歳 3 か月) に CT, US 血管造影,  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT 肝胆道シンチおよび  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -Sn コロイド肝シンチを施行した。CT, US および血管造影では、腫瘍は肝右葉前下区域に存在し hypervascular tumor であった。境界鮮明で内部に隔壁と壊死を思わせる所見も認められた。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -Sn コロイド肝シンチでは腫瘍は正常肝実質より低い均一な集積像であった。 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT 肝胆道シンチでは、集積は徐々に増し、30 分で正常肝実質と同等の集積像を呈し、60 分では集積の減衰が見られた正常肝実質と対照的に高集積像を呈した。病理診断は、高分化型の epithelial pure fetal type であった。Hepatoblastoma に対する肝胆道シンチ施行例は少なく、われわれが調べた限りでは自験例を含め過去 3 例で、その中で集積が認められた 2 例は、いずれも epithelial type であった。

# 12. 肝癌の骨転移における $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT の有用性について

岡田 秀樹 三宅 秀敏 脇坂 昌紀  
石田 裕 谷口 賢二 相川 久幸  
中島 彰久 芦澤 昭 (大分医大・放)

今回われわれは、臨床症状または  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MDP シンチグラム検査において、肝癌の骨転移の疑われた 5 人の患者に対し、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT を用いて全身または標的スキャンを施行し、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT の骨転移検索における有用性を検討した。

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT の異常集積の認められた 3 例では、計 33 か所の異常集積巣を認めたが、それらのうち、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MDP の集積した部位は 20 か所であり、また  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MDP のみ集積が認められた部位は、単純 X 線像や、その後の臨床症状の経過などから、骨転移巣の可能性は低く、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT は  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MDP よりも高率にかつ特異的に肝癌の骨転移巣に集積した。残りの 2 例は、その後の臨床症状の経過などから骨転移である可能性は低く  $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT は肝癌の骨転移検索に有用と考えられた。